

私はこの3週間の教育実習を誰よりも楽しんだと思う。やらなければならないことやなかなか上手くいかないこともあったけれど、それが自分の成長につながると思うと楽しかった。他の実習生を見ていると指導教諭にダメ出しされて凹んでいたり、愚痴をこぼしていたけれど、私はそのようなことはなかった。指導教諭との相性もあるかと思うが、言っていたことを素直に受け入れられることができた。又、このように指導していただけるのは実習生の特権であり、されに授業が良くなるものである。プラスに受け取っていて、これも成長につながると思うとダメ出しをもらえるのがとても嬉しかった。私は毎朝校舎前で挨拶することを心掛けた。どれだけ1限の授業が不安であっても挨拶へ行った。元気に目を見て挨拶してくれる生徒がほとんどで元気をもらうことができた。又、毎朝挨拶しているおかげで担当学年以外の学年の生徒からも顔と名前を覚えてもらうことができた。

授業をしていて全員に面白い！と思ってもらえるような授業をするのは難しいと感じた。寝てしまっている生徒もいて自分の授業は大丈夫かなと思うことがあった。しかし指導教諭が「全員に興味を持たせる授業は難しい。不安になると寝ていたりする生徒に目がいってしまうけど、クラスの中にはしっかり聞いてくれている生徒も必ずいる。その生徒に目を向けてあげたらいいよ。この実習で学年の1人でいいから歴史って面白いって思わせたら、この実習は成功だと思うよ。」と言っていた。その後の授業で生徒を見ているとうなずいて聞いてくれている生徒やノートにメモを取ってくれている生徒がいることに気付けた。又休み時間に話しかけてくれた生徒が「先生の授業はわかりやすく面白いです。」と言ってくれた。とても嬉しかったし、指導教諭とその生徒の言葉が自信へとつながった。

この教育実習を通じて学んだことは発問の難しさである。発問の仕方、タイミングをしっかりと考える必要があると思った。発問をするためにはその前に説明が必要である。その説明が伝わっていないと発問に答えられない。つながるように発問するように心掛けたが上手く伝わっていないことがあった。又、ずっと説明でも生徒はあきてしまう。そのために発問を入れたいがどのような発問を入れるのか考えるのも大変だった。私が生徒の時は何も思わなかったが、教壇に立つようになってから発問の大切さを知ることができた。

この実習を通して、わたしは将来ずっと生徒のために学び続ける教員になりたいと思った。また自分自身社会科をもっと好きになり、楽しいと思えるようになりたいと思う。実習中たくさんの先生とお話することができた。どの先生も「私達はずっと学び続けなければならない」とおっしゃっていた。毎年生徒は変わっていく。だから先生も変わっていかなければならない。その時に合う教え方を常に考えていく必要がある。そのためには教員自身も日々学び続けていく必要がある。自分の授業は大丈夫と思わず、謙虚に毎日反省し、より良い授業を作っていきたい。そして生徒に社会科の面白さを伝えたい。伝えるためには私自身が好きでなければ伝わらない。大学生のうちにたくさんの知識を身に付け、自分の中で社会科の面白さを見つけ出しおきたい。そして1年後どこかの学校で社会の授業を誰よりも楽しんで行い、生徒にもその楽しさを伝えていきたい。